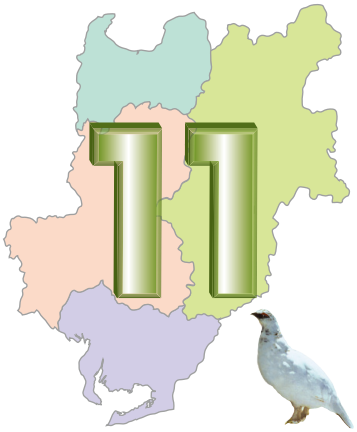
広報 中部の森林（もり）

写真：「秋の段戸湖」（愛知所管内）

私の森語り「竹ってホントに邪魔物ですか？」
NPO法人いなだに竹Links 代表 曽根原宗夫

特集
・㊞㊞木曽ひのきブランド化10周年記念イベント
各地からの便り
・伝統技法の継承に向けて(三ツ緒伐り研修会)
・「森の学校」と「秋の森マルシェ」に参加　ほか
シリーズ
・森林官からの便り、私の森語り、中部の保護林、
　秘蔵写真・今は昔の林業



国民の森林・国有林
林野庁中部森林管理局
2023/No.236

ブランド材で未来をつくる「㊞㊟木曽ひのきブランド化十周年記念シンポジウム」

【中部森林管理局・木曽森林管理署】

十月十八日、㊞㊟木曽ひのきブランド化十周年記念シンポジウムを木曽郡の「上松町ひのきの里総合文化センター」にて開催しました。

当局では、平成二十五年度より、木曽谷の国有林野から産出される林齢八十年生以上の良質な高齢級人工林ヒノキを「㊞㊟木曽ひのき」と称して販売しています。本シンポジウムは、高齢級人工林ヒノキのブランド化を通じて、今後の木曽地域の林業・木材産業の発展を考えるとともに、情報発信の機会としたところ、木曽地域の林業・木材産業の方々、町村関係者、当局職員など、約二〇〇名が参加しました。

同時開催されたブランド材製品と林業従事者写真コンテスト作品の展示

主催者を代表した挨拶で今泉局長は、「木曽谷特有の厳しい自然環境で生育した高齢級人工林ヒノキは、年輪幅が密で木柄も良く、天然木曽ヒノキに勝るとも劣らない材質を持つ点が評価され、ブランド化が進められてきたものであり、当局ブランド材の第一号」と経緯を説明し、この間に多くの皆様の努力により、各方面からの評価をいただきながら、十年という節目を迎えたことに感謝の意を伝えました。

ブランド化を提唱した当時の局長であるノースジャパン素材流通協同組合の鈴木信哉理事長には、「㊞㊟木曽ひのき誕生の経緯と木曽谷林業の将来展望」と題した特別講演をしていただき、当局管内に設定した「木曽悠久の森」と高齢級人工林ヒノキのブランド化の関係を振り返り、将来展望として、

①天然木曽檜の供給を続ける
②㊞㊟の品質安定供給（伐採計画は品質で産地バランス良く計画）
③㊞㊟超々高齢級施業方針と特別表記の検討（百五十年、二百年伐期にする場合の施業方針など）
④㊞㊟の業界認知度向上（製品への表示方法統一など）
⑤表木曽・裏木曽時代も踏まえ協調
⑥高齢級人工林ヒノキの扱い（民有林でも同じ品質のものの扱いを検討）
⑦用途を多様的に開発・定着（従前用途に付加／高級建具用材としてのヒノキ柾平の製造、ホテル高級部屋向けなど）
⑧主製品用丸太以外の有効フル活用（伐根や背板端材の活用、節だらけ材の販売など、すべてムダなく使うカスケード産地化）
⑨搬出コストを考える（全木集材で立木材積フル活用など）
⑩㊞㊟以外にも関心向ける（カラマツ、アカマツ、広葉樹）
⑪地元加工工場の維持・拡大
⑫木曽谷すべて木造化・木質化方針

などについて提言され、最後に「木曽路は、すべて山の中である」と結ばれました。

鈴木理事長による特別講演の様子

その後、当署の若手職員が企画した「突撃！木曽のひのきはいったいどこへ？」を放映しました。これは、木曽ひのき材で住宅を建築している会社の方に木材にこだわる理由やお客様のニーズ、木材生産者に望むことなどをインタビューした動画で、長崎県の谷川建設と長野県の美し信州建設の方

にご協力いただきました。

続いて、令和三年に開庁した木曽町役場本庁の設計にあたった千田建築設計の千田友己共同代表から『木の國・木曽の「文化と産業のシンボル」としての庁舎建設』と題し、川下側からの視点で講演していただきました。

千葉県に事務所を構える千田共同代表は、「初めて庁舎の敷地を訪れた時、木曽谷の山をしっかりと正面に見ることができるような真っすぐの平屋建てを考えた」と語り、一般公募の設計プロポーザルで選ばれた設計について、朱色の大屋根の上に越屋根、木曽地域の伝統的な出梁造りから考えた「出梁ユニット」を組み合わせて屋根を支える構造。更に、構造材には木曽産を使用し、常に山とともにあることが日常的に感じられるような場所とし、建築と社会とが相互に影響し合う有機的な関係についても説明されました。

そして、「穏やかな立ち姿でありながら、強く町のシンボルとなっていけると良い」とのメッセージを伝えられました。

最後に「木曽ひのきブランド材の今後を見据えて」をテーマにパネルディスカッションを行いました。

コーディネーターに鈴木理事長、パネラーとして、信州大学学術研究院の植木教授、上松町の大屋町長、株式会社勝野木材の勝野常務取締役、木曽官材市売協同組合の原田副理事長兼専務理事、当署の郷原署長が登壇して木曽谷の林業・木材産業の将来等について意見を交わし、前向きな発言や新たな提案に会場から大きな拍手がおくられました。

パネルディスカッションの様子

限定企画として実施された木曽町役場庁舎見学

木曽町役場庁舎建設の講演に耳を傾ける参加者

多くの見学者が見守る中で倒れるヒノキの大木

先輩から指導を受ける様子

伐採した木の梢を切り株に挿して山神に感謝

伝統技法の継承に向けて（三ツ緒伐り研修会）

【東濃森林管理署】

九月八日から九日の二日間、恵那市岩村町の岩村国有林にて、三ツ緒伐り研修会を開催しました。

三ツ緒伐りとは、三ツ紐伐り、三ツ伐りなどと呼ばれる立木の伐倒方法で、立木へ三方向から斧を入れ伐倒します。手順としては、伐倒方向から見て左右に二箇所、伐倒方向とは逆に一箇所の弦と呼ばれる部分を残した状態で立木をくりぬき、伐倒方向とは逆に残した弦を伐ることにより正確な方向へ伐倒する方法で、貴重な木材を伐倒する際に用いられています。

この伐採方法は、伐倒する際に生じる材の芯抜け（伐倒した際に中心部が切り株側に残ってしまうことにより、木材の中心部に穴が空いてしまうもので、木材の最も価値のある箇所へ損傷を与える）、割裂（伐倒した際、木材が割れたり裂けたりする状態になること）、胴折れ（伐倒した際、木材が途中で折れてしまうこと）などの木材への損傷を与えないことはもとより、林業の作業で最も危険とされる伐倒作業を安全に行える方法として、江戸時代前にはこの方法が用いられていたようで、今日でも、伊勢神宮の式年遷宮用の御神木伐採等ではこの方法が用いられています。

今回の研修会は、この伝統技法の継承に向けて、神宮司廳営林部、上松三ツ紐伐り保存会、裏木曽三ツ伐り保存会より四十名の杣夫に集まっていただき、三団体で混成チームを四組つくり、先輩杣夫からのアドバイスを受けながら、各組一本ずつヒノキ（胸高直径約六〇センメー、樹高約二五メートル）を伐倒しました。

普段は見ることができない伝統技法を一般の方々に公開したところ、百名を超える方々が見学に訪れ、迫力ある伐倒風景をご覧いただきました。

この伝統技法の継承に向け、引き続き、協力してまいります。

※三ツ緒伐りについては、当局ホームページの「木曽式伐木運材図会」もご覧ください。

六者協定に基づく大学院生を対象としたフィールド実習

【技術普及課・東信森林管理署】

九月十三日、大学院生二十二名を対象に、東信署管内の浅間山国有林にてフィールド学習を実施しました。これは、平成二十八年度に、筑波・山梨・信州・静岡の四大学と関東局・中部局を合わせた六者間で締結した「山岳科学の発展に向けた連携協定」に基づいて、毎年協力している取組です。

参加した学生は、山岳科学に関連する教育、環境、都市計画、植生や昆虫など、それぞれ幅広い分野の研究を行っていますが、林業に関する実習は初めての学生がほとんどで、今春にカラマツエリートツリー展示林を設定した「清万採種園」を案内し、カラマツ林業の発展には、種子の安定供給、エリートツリーのような育種技術の導入が必要であることを学んでいただきました。

その後、カラマツ造林地に移動し、下刈り回数の削減による造林費用の抑制、伐造一貫作業などの林業の黒字化に向けた取組、新しい林業に向け期待される新技術について説明し、最後に「くくりワナ」の実演を行いました。最近、ジビエが注目されていることもあり、鳥獣被害に関心を持った学生たちから多数の質問があるとともに、成長が早いエリートツリーの強度や割高なコンテナ苗の普及率など、研究者らしい着眼点からの質問もみられました。

森林・林業への関心を高め、林業や木材産業への就業機会の促進にもつながるよう、継続して学ぶ機会の提供に取り組んでまいります。

カラマツ造林地の説明を聞く大学院生たち

国有林を活用したマウンテンバイク大会の開催

【木曽森林管理署】

九月十七日、木曽郡王滝村の国有林林道を舞台に、ＳＤＡ王滝クロスマウンテンバイク大会が開催されました。王滝村は総面積の約八三パーセントを国有林が占め、良質な木曽ヒノキをはじめ木曽五木の産地として知られています。林道の総延長は約三〇〇キロメートルにのぼり、同じルートを通ることは殆どないワンウェイでコースを設定することができます。

天候にも恵まれた大会当日、王滝村長によるスタートの号砲を皮切りに、国有林の雄大な自然の中を、全国から訪れた約千二百名の選手が、最長の一二〇キロメートルのコースなどを駆け抜けました。

御嶽山麗のコースで高低差が大きく、未舗装の凸凹道も多いため、選手は大変苦戦された様子でしたが、大きな事故もなく終えることができ、選手からは「御嶽山やダム湖を横目に、普段は走れない国有林のコースを堪能できた」「来年も参加したい」との感想が寄せられました。

翌日には、四二キロメートルと二〇キロメートルのダートマラソンも開催され、約百七十名の選手が参加しました。

また、今年の七月には、王滝村、上松町の国有林林道において、トレイルランニングレース「ＯＳＪ　ＯＮＴＡＫＥ１００」が開催され、約千三百名の選手が、二日間にわたり一〇〇マイル（一六〇キロメートル）か、一〇〇キロメートルのコースを走りました。人口約六百七十人の王滝村において、両大会のもたらす経済効果は大きく、今後も地域のニーズに応えていきたいと考えています。

国有林内を走り抜ける選手たち